

【17年の豚肉年末商戦】国産・輸入ともに予想外の不振、一部で投げ物も

年末商戦もヤマを超えつつあるが、ことしの豚肉需給は、先月中～下旬まで好調を維持していたものの、12月から失速、決まった数量以外は目立った動きがなく、そのまま12月最終週を迎えることになった。量販店も正月三が日以降は通常の売り出しに戻るとみられるものの、年明け後の月前半の相場は、越年在庫および末端の在庫消化次第といえる。

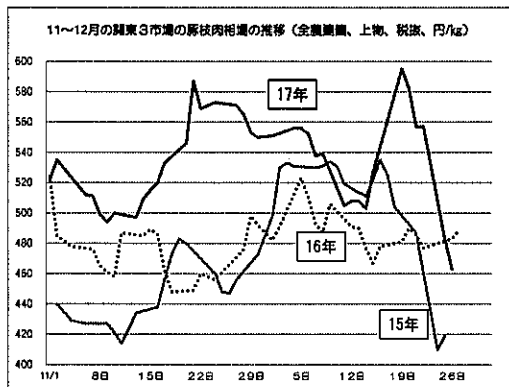
豚肉は気温の低下に伴って11月中～下旬までは国産・輸入ともに（パーツの強弱があるにせよ）末端需要、相場とも堅調に推移していた。だが、月替わり前後から失速し、末端の引合いは鈍いまま終わりそうだ。例年通り、末端の販促が12月中旬以降は牛肉にシフトしたこと、さらに国産は11月までの相場高を受けて12月の見積価格が強めだった結果、スーパーの年末向けの発注もそれなりのボリュームに止まり、キャンセルこそないにせよ、決まった数量が流れているのみ。追加補充の動きもなく、静かな商いとなっている。

さらに国産は12月第4週目から出荷頭数が1日当たり7万頭台、第5週からは8万頭台に上るなど後半の出荷の集中により、下落相場となっている。末端の年末手当てはほぼ終わっているため、年明け1週目のカット用の枝の確保以外は相場の上げ材料は乏しく、今後も8万頭台の出荷が続けば、年末の際も大きな相場上昇はないとみられ、せいぜい上物税抜きで500円前

後との見方もある。

12月に入ってから動きが鈍化している。1カ月当たり3万t台の輸入が続くなど供給過剰を反映したものとみられる。パーツの動きも国産と同様にバラ、カタローズが失速気味で、ロイン系、スソ物の動きはほぼ止まっている状況で、投げ物もチラホラみられる。コストから凍結回避もできず、「入荷量が減ってくる1月中～下旬ごろまで何とか在庫を回してゆければ」(関東の卸筋)との声も。

今後については、北日本で寒波が到来するため、鍋物需要の強まりで一部追加オーダーも考えられるが、それでもバラ・カタローズを中心に必要な部位、必要量とみられるため、在庫消化に苦勞しそうだ。年明けは、越年在庫の状況、末端の在庫消化状況に左右され



そうだが、量販店も三が日以降は通常の売り出しに戻るうえに、「成人の日」を含む3連休の需要に期待したいところ。とくに輸入チルドに関しては、通関遅れなど、このポジションのデリバリーがズレ込んだ場合、瞬間的なひっ迫感が生じる恐れもある。

○ 厚労省が対ミャンマー、対タイ輸出牛肉取扱施設を更新

厚労省は26日、対ミャンマー及び対タイ輸出牛肉取扱施設の内容を更新したと発表した。

対ミャンマー輸出牛肉取扱施設は、新規に宮崎県のサンキョーミート霧島ミート工場(と畜場)を追加。宮崎県の小林市食肉センター(と畜場)の登録を取り消した。また、北海道の北海道畜産公社道央事業所早来工場早来食肉流通センター(と畜場)は英語表記を変更し、食肉処理場として北海道畜産公社道央事業所早来工場を追加登録した。

対タイ輸出牛肉取扱施設では新規に、姫路市の和牛マスター食肉センター(と畜場及び食肉処理場)を追加。埼玉県のと畜場・和光ミートセンター(と畜場)・アグリス・ワン和光ミートセンター牛肉加工室(食肉処理場)は、アグリス・ワン和光ミートセンター副生物工場(食肉処理場)を追加登録した。北海道畜産公社道央事業所早来工場早来食肉流通センター(と畜場)・北海道畜産公社道央事業所早来工場(食肉処理場)では英語表記を変更した。